ウィズコロナ・ポストコロナ時代におけるマスクの重要性

～新型コロナとインフルエンザ共感染の予防に期待～

ポイント

・新型コロナとインフルエンザの共感染は重症化しやすく新たな脅威となる。
・昨年度のインフルエンザ罹患数は例年の約 2,000 分の 1 。
・新型コロナとインフルエンザの共感染を防ぐためにワクチン接種に加えてマスク着用が重要。

概要

北海道大学遺伝子病制御研究所癌生物分野の野口昌幸名誉教授らの研究グループは，新型コロナウイルスとインフルエンザウイルスの共感染を予防するためには，マスクが重要な役割を果たすと提言しました。

2020 年の秋ころ，新型コロナウイルスとインフルエンザは初期症状が似ていることから，その鑑別はもとより，重篤な共感染による社会への影響が大変危惧されていました。しかし実際には，日本においては 2020/2021 年冬のインフルエンザ罹患数は劇的に減少し，懸念されていた新型コロナウイルスとインフルエンザウイルスの共感染もごく少数の発症でした。

研究グループは，厚生労働省と国立感染研究所の発表する日本のインフルエンザワクチン接種とインフルエンザ罹患数に関する統計データを解析しました。その結果，2020/2021 年シーズンにおいて，インフルエンザワクチンの接種数はここ 10 年来ほとんど変わっていないにもかかわらず，インフルエンザ罹患数は例年の 2,000 分の 1 に減っていました。この主たる要因として，日本人の生活スタイルに古くから取り込まれているマスクの着用が大きく寄与していると考え，報告しました。

新型コロナとインフルエンザの共感染を予防するためにも，ワクチン接種に加えて，日本の古くからの習慣であるマスク着用という公衆衛生の基本を心がけることが重要です。

なお，本研究成果は，2021 年 7 月 1 日（木）公開の European Journal of Internal Medicine 誌にオンライン掲載されました。

マスクはいつまでしなくちゃいけないの？

【背景】

2019 年に発生した新型コロナウイルス感染症は，世界中に未曾有の惨劇をもたらしました。現在，新型コロナウイルスに対するワクチン接種が普及し，新規感染者の減少がみられ，その効果が期待されています。このような流れの中で，ワクチン接種後のマスク着用の必要性が世界の各国で議論されており，ワクチンの効果に過剰な期待をするあまり，ワクチン接種者はマスク着用が不要であると宣言する国も出てきています。

一方で，感染力がさらに強化された変異種が世界に蔓延しつつあり，変異種に対するワクチンの効果も限定的であると指摘されています。このように，新型コロナウイルス感染症ワクチン普及後のマスクの必要性に関しては世界中の各国で多くの議論がなされており，いまだ結論が出ていません。

新型コロナでその陰に隠れてはいますが，インフルエンザ感染はこれまで数十年にわたり日本でも年間数千人の人の命を奪ってきました。また，新型コロナウイルスとインフルエンザの共感染による重症化が報告されており，社会への影響が大変危惧されていました。しかし実際には，日本においては 2020/2021 年冬のインフルエンザ感染者は劇的に減少しており，新型コロナウイルスとインフルエンザの共感染もごく少数の発症でした。このインフルエンザ罹患数減少の主たる要因として，日本人の生活スタイルに古くから取り込まれているマスクの着用が考えられます。

【研究手法】

厚生労働省が公開している日本の 2012 年から 2021 年のインフルエンザワクチン供給量・接種数と，国立感染研究所が公開している約 5,000 の日本の定点医療機関におけるインフルエンザ罹患数の統計解析を行いました。

【研究成果】

インフルエンザワクチンの日本全体での供給量・摂取数はここ 10 年間ほとんど変化していないにもかかわらず，2020/2021 年冬のインフルエンザシーズンにおけるインフルエンザ罹患数はわずかに 560 人で，例年の 2,000 分の 1 という劇的な減少を示しました（図 1)。この劇的なインフルエンザ罹患数減少の主たる要因として，新型コロナウイルスへの対策として日本の社会において古くから普及し，習慣としていたマスク着用が重要な要因であったと考えられました。

【今後への期待】

新型コロナ感染はワクチン接種で新規感染者数の減少と落ち着きが期待されていますが，未だワクチン以外に新型コロナ治療薬の開発はその途上で現段階では本当の意味での新型コロナ治療の切り札がない状況です。新型コロナ感染の蔓延で陰に隠れていますが，インフルエンザ感染は例年日本でも数千人以上の方が命を落としており，新型コロナとの共感染は重篤な社会的影響を及ぼしかねません。

日本は欧米各国と異なり，以前からマスクの着用に抵抗がなく，インフルエンザ流行期や，花粉症の時期には，日常的にマスクを着用する生活を送ってきました。

新型コロナワクチンによるコロナ患者の発症数の減少への期待が高まっています。しかし，野口教授らはマスクをすること，手洗いをすること，集団での行動や飲食を回避することなどの感染予防がこれからも引き続き重要と考えています。

論文情報

論文名	Wearing a mask does indeed matter: Lessons from the 2021 influenza infection season（マスクの重要性：2021 年インフルエンザ流行期からの教訓）
著者名	小林慧悟[1], 野口昌幸[2]（[1] 慶應義塾大学医学部呼吸器内科 [2] 北海道大学遺伝子病制御研究所癌生物分野）
雑誌名	European Journal of Internal Medicine（ヨーロッパ内科学学会の専門誌）
ＤＯＩ	10.1016/j.ejim.2021.06.021
公表日	2021 年 7 月 1 日（木）（オンライン公開）

お問い合わせ先

北海道大学遺伝子病制御研究所癌生物分野　名誉教授　野口昌幸（のぐちまさゆき）

ＴＥＬ　0439-52-2366　ＦＡＸ　0439-55-7610

メール　m_noguch@igm.hokudai.ac.jp；noguchi@gengendo.jp

配信元

北海道大学総務企画部広報課（〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 5 丁目）

ＴＥＬ　011-706-2610　ＦＡＸ　011-706-2092　メール　jp-press@general.hokudai.ac.jp

【参考図】

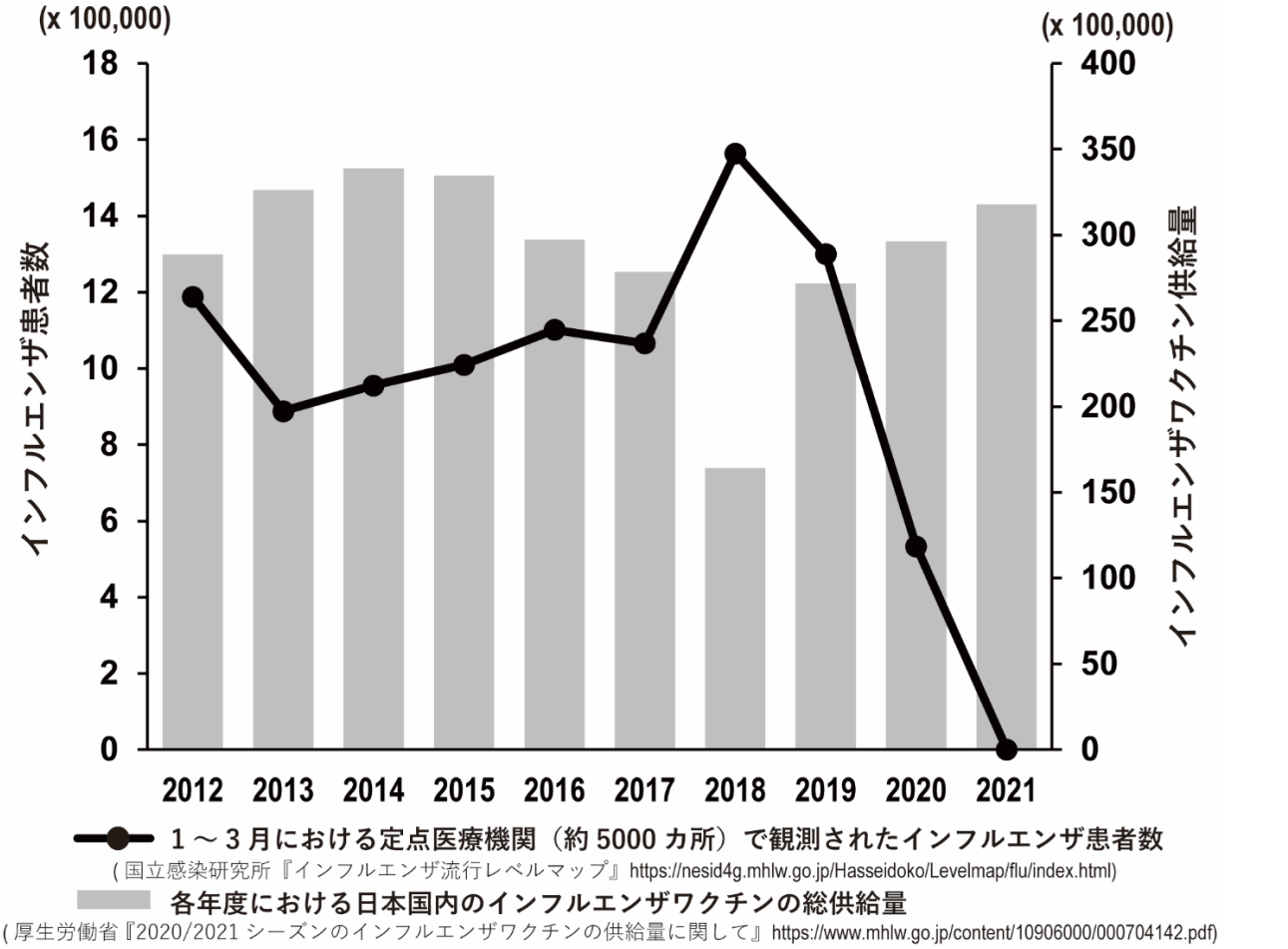

図 1. 定点医療機関で観測されたインフルエンザ患者数（折れ線グラフ）と日本国内のインフルエンザワクチン総供給数（棒グラフ）の年次推移